

# 浮上する記憶 -振り返りを支援するライフログブラウジングシステム-

## Emergence of memories -Lifelog browsing system supporting reflection-

学籍番号：201221608

氏名：米島 まどか

Madoka YONEJIMA

人間生活の記録をデジタルデータとして保存したものはライフログと呼ばれ、その利活用に注目が集まっている。ライフログは、ただ蓄積するだけでなく、それを生きた振り返りが必要だと考えられている。しかし、ライフログの量は膨大なため、蓄積したままで放置しては死蔵され、忘れ去られてしまう。そこで本研究は、記憶を浮上させ、振り返りを起こすことを目指したライフログブラウジングシステムを構築し、その効果を検証した。

本研究で開発したライフログブラウジングシステム **LogView** は、見つけようと意図していないライフログと「出会う機能」、目的のライフログを「探す機能」、閲覧したライフログと関連のあるライフログを探し出す「広げる機能」の 3 つを持つ。出会う機能には半受動的インタフェースとランダム順の提示を、探す機能には時系列順・評点順での提示と文字列と日付による検索を、広げる機能には閲覧中のライフログに対して時系列で前後に蓄積されたライフログと共通の単語を持つライフログの検索を実装した。

開発したシステムを用いて評価実験を行った。15 名を対象に実験期間は 1 週間とした。システム利用前後にライフログの意義や振り返りの必要性などを問うアンケートを実施し、日誌法により毎日システムを利用した印象などを記録してもらった。

実験の結果、以下の 3 点が明らかになった。(1)忘れていた記憶を甦らせることができた。特にランダム順での提示は発見を促し、時系列を用いた提示方法はライフログの内容理解を促した。(2)ライフログを作成・蓄積した時には分からなかった、新たな発見をすることができた。(3)ライフログへの印象が変化した。全体としては、ライフログに対して他者との優劣を比較するツールであるという印象が弱まった。また、ライフログが持つ主観性の強さによって、印象の変わり方が異なった。

本研究により、ライフログを用いた振り返りのプロセスとその効果の一部が明らかになった。今後の課題は、より効果的な振り返りを行うためのシステム改良と長期的な実験を行うことである。

研究指導教員：宇陀則彦

副研究指導教員：松村敦